

文化

武力を捨て庭園をつくる

東アジアの国際情勢を巡って不安を煽り、立憲という国の基本を侵してまで武力への道を歩むのが賢いことだろうか。ここで本当の賢さを見せてくれる韓国の造形作家・崔在銀氏と、日本の建築家・坂茂氏の提案「朝鮮半島の非武装地域にかける空中庭園」を紹介する。筆者と崔氏とは二〇〇〇年、「境界」をテーマにした映画「On The Way」に協力した仲である。今回の提案はこれにつながるもので、韓国の政府機関で南北統一などを担当する統一部(統



一省)に出され、韓国メディアで報道された。

一九八九年、ベルリンの壁が崩壊した。歓声をあげながらチェックポイントを通る東ドイツの人々、ブランデンブルク門近くの壁に登る東西ベルリン市民、ハンマーやつるはしで壁を壊す人…一連の映像は一つの時代の終わりを示していた。

これで、一つの国の中に越えられない境界があるのは朝鮮半島だけになった。歴史は終わっていない、道半ばであるという気持ちを



中村 桂子

J-T生命誌
研究館館長

最も「非政治的」な場に

表したのが「On The Way」である。韓国の少女が板門店の三八度線の南側に立ち、私の詩を北に向かって読んでくれた。詩は生きものの境界線はいつも開いています。

人間も生きものですよ。草原の中の生きものと共に思いました。

地球上の閉じた境界はいつか開くと

で終わる。生きものにとって自己を明確に示す境界は重要だが、それは開いている。この時もアリが境界を示す数珠のコンクリートの壁を越えて歩いていた。

そして今、三八度線をまたいで「空中庭園」を実現しようと崔、坂茂氏が考えているのである。場所は半島中央部にある江原道鐵原郡。三八度線の南北二キロ、計四キロある非武装地帯に空中庭園をつくり南北の人はもちろん世界中の人が自由に歩けるようにする計画である。

五三年以来、六十二年もの間誰も足を踏み入れていないこの地域は、地球上で最も美しい自然を誇る場となっている。東西百五十五キロ(約二百五十キロ)続中に生存する生物は六千種、絶滅危惧種が百六種もある。世界にとって大事な生態系である。

まっている。しかも小さなプラスチック製の移動機にからないうえ移動もしており、場所をわからない。つまり、空中に橋をかけるのは、人間が入りこんで良質な自然を壊さないためと地雷を踏まないためなのである。人間から自然を守り、地雷から人間を守る。なんとも皮肉な話である。



設計図を見ると、自然に生えた竹が支える橋が地上三〜六メートルの高さで十二キロ続き、一キロごとに庭園、三八度線には高さ二十センチのこけしも竹製の風の塔がある。すべて自然素材でできており、脇には川が流れている。崔氏も坂茂もこれ

まで竹を生かした建築物を造ってきており、強度その他は自信があると語る。橋の南北両側に絶滅危惧種の「シード・バンク」と「生態系資料室」が設けられ、この建物については南北の作家の共同作業が計画されている。

戦争が生んだ最も政治的な場所をすばらしい生態系という最も非政治的な場として認識し、国連など国際機関を通して世界の人々の協力を求めるという。芸術家だからこそこのような形で動ける、だから動くのだという言葉が心に響く。武力への道が現実的であり、空中庭園は夢と決めつけるのは間違っている。私たちの意志で、武力を捨て美しい庭園をつくることは可能なはずである。